

# わたしの聖戦

◎◎女性が働くという文化◎◎64

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

## キューバの風に吹かれて

2月19日、キューバのカリスマ指導者、フィデル・カストロ氏が退任の意向を示した。奇しくも、

その前日の18日にキューバから帰国したばかりだったため、そのニュースは少なからず衝撃だった。

私も含めてキューバの情報詳しく得ている人は日本に多くない。カストロの名前ぐらいは耳にしたことがあるにしろ、何せキューバ革命は1959年のことである。むしろ最近、キューバの音楽家たちをドキュメンタリータッチで描いた「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」や、若きチェ・ゲバラの放浪記である「モーターサイクル・ダイア

リーズ」の映画でキューバという国の断片をかじったという人のほうが多いかもしれない。

キューバはご存知のとおり、社会主義国である。しかし、革命後、カストロを中心に医療と教育に力を入れたこともあり、GDP 90位という貧困国でありながら男女とも平均寿命は70歳を越えている。また、識字率も高く、医療も教育も無料という魅力的な制度を持っている。私は今回、キューバの人々の長寿の秘密を探りたくてメキシコ経由で訪問を試みた。

大病院との連携などの充実が全体のシステムを支えている。また、ハーブやホメオパシーなどの代替医療（西洋医学以外の医療）も併用され、ホメオパシー専門の大きなクリニックが街中にある。貧しくてもキューバ人の寿命が長いのは医療システムののおかげとたいいてい

キューバの  
いちめんにはながるサトウキビ畑



の人々は解釈している。確かに、近頃日本で話題になる、検診を受けない妊婦の存在や救急病院受け入れ困難の問題は発生しようがないようになってきている。

要とされる個人レベルの日常生活、例えば食事や睡眠や運動などはどうなっているのだろうか？ そんな疑問を抱えながら、ハバナの町を歩き、キューバで生まれキューバで育った人々に聞き取りをし、市場をのぞき、キューバの人々が行くレストランに足を運んでみた。

一見そこには長寿を生み出した生活習慣を見出すことはできなかった。何せ、狭くて古い住宅事情、葉巻やたばこをくゆらし、ラム酒を呑み、夜遅くまで踊り、歌う。例のごとく、水道の水は飲めず、トイレの排水状態も決して良いとはいえない。また、食べ物の味付けは濃く、野菜の種類は限られている。日頃家で作るという手製のお菓子は、砂糖を小さく丸めて油でじっくり揚げたもの。甘くて油っぽくて、ふたつとは食べられない。1日平均15ドルの生活と報道

されているとおり、キューバの人々の生活は貧しく、物自体が乏しい。携帯電話もネットもほとんどの人は縁がないのだ。しかし、このゆつたりと流れる空気心地よさ、人懐っこく恥ずかしげな人々の笑顔にはめったにお目にかかれない。50セントもしないコップ一杯の砂糖きびジュースの味は格別だ。

一緒に動いてくれたホセ氏に聞いてみた。ホセは60歳前後のエンジニア、82、86歳と両親ともに健在である。「なぜ、キューバの人々は長生きなの？」返ってきた答えを聞いて笑った。「ゆつたりとした生活をしているからじゃないかな。それにしても日本人はすごく忙しくしているのに、なんで寿命が長いんだ？」

小難しいことは考えずに、とりあえずキューバの風を楽しもうと思うしかなかった。

イラスト・三浦義雄